

5. 造山古墳前方部所在石棺研究の現状と課題

はじめに

岡山市造山古墳前方部に位置する石棺については、これまで百年近くの研究の歴史がある。造山古墳をめぐる本研究プロジェクトの過程では、2008年にはじめて本石棺に関する三次元計測が試みられ、研究の新たな一步を踏み出したものといえるが、本石棺研究にあたっては、先学によって提起されてきた論点を整理し、これからの課題を探る作業が不可欠となる。本稿は、学史にみる本石棺の位置を確認し、研究の課題を明らかにすることを第一の目的とする。その上で若干の予察を行いたい。

(1) 研究史の検討

造山古墳前方部所在石棺の研究史について、時系列に沿いつつ概述しよう。

本石棺の存在が学界において広く認識される契機となったのは、高橋健自「石棺石槨及び墳を論ず(1)」(1915年)である。この論文は、古墳時代石棺に関する体系的な形式分類を示したもので、石棺研究の嚆矢となったものである。その中で高橋は本石棺に関して、長持形石棺のうち、刳り抜き式の最も珍しい類例として身の図面を提示しながら言及した。石棺の形式分類研究の成立当初から、本石棺の位置づけをめぐって注意がなされてきたといえる。

続く和田千吉「備中郡窪郡新庄下古墳」(1919年)は、本石棺の来歴をめぐる、次のような貴重な伝聞を記した。「前方部頂上には荒神社あり、傍に彫抜にして、組合式の形に造りたる珍しき石棺と、又社の他の傍に蒲鋒形石棺蓋の残缺を存せり、何れより発見せられたるものなるや詳ならずと雖、村民の語る處によれば、此石棺の蓋は約70年前、此宮の前より出で、石槨等なかりしと、元来瓢形古墳よりは、前方と後円の二個所に石槨又は石棺の存するもの往々これにあり。」(和田1919、34頁)。この村民の語りは、本石棺が造山古墳前方部から出土したことを示すものであった。

1938年の梅原末治「備中千足の装飾古墳 附造山古墳遺存の石棺」は、本石棺の蓋と身双方の実測図(図5.1-1)を提示した点で重要である。この実測図は近年に至るまで検討の際の基礎となっており、本石棺に関する資料化の端緒をなすものであった。

西川宏「岡山県造山古墳とその周辺の前半期古墳」(1971年)では、本石棺の来歴に関するもうひとつの伝聞が記された点で重要である。すなわち、本石棺はもともと車塚古墳から出土したと伝えられるが、車塚を削平した1921年ごろにはすでに造山に置かれていたというものである。車塚古墳は造山古墳の西に位置するが、現在は消失したものとされ、墳形・規模も確かではない。以後も西川は車塚古墳を本石棺の帰属古墳と考えた(西川1986)。

1974年に発表された間壁忠彦・間壁葎子「石棺研究ノート(1)」は、石棺石材に関する自然科学的研究の端緒をなすが、その中で本石棺の石材が阿蘇凝灰岩であることが明らかとされた(間壁忠彦・間壁葎子1974)。これはX線回析によって、大分県臼杵熊崎露頭と熊本県山鹿臼塚古墳石棺、岡山県小山古墳石棺、そして本石棺との比較の中で導かれたものであり、肉眼観察も容易とされた。さらに本石棺の形式分類に関しても、次のように論究した。すなわち形式に関して、①身は長持形だが刳り抜きであり、蓋は屋根形に近い点、長持形石棺としては特異なものである点、②長持形石棺とはいえ、そうした身と蓋自体が九州の舟形石棺に近い点を指摘した。続く1975年の、長持形石棺の石材を分析・考察した論考では、本石棺の歴史的位置に関して、大王家・葛城一族にきわめて近い人物を推測した一方で、畿内からの石棺の授受を快とせず、吉備の力で作られた九州系の棺であるものと解釈した(間

壁忠彦・間壁菫子1975)。こうした歴史的評価は、1974年論文の形式をめぐる検討結果を基礎とするものといえる。石材・形式双方において本石棺に九州的要素を明確に見出した点は、その後の多くの研究の基本的認識となった。

西谷真治「長持形石棺」(1982年)は、本石棺に関する型式学的検討に基づく年代観を提示した点において注目しうる。西谷は長持形石棺をA型式・B型式に分類した上で、本石棺をA型式第3期、すなわち5世紀後半～6世紀初頭に位置づけた。この第3期に現れる特徴について西谷は、「蓋の頂部に並行する二本の稜がある(大和金屋・紀伊大谷・備前造山・豊後下山・豊後世利門)。蓋石の上面を蒲鉾形に作るのを本来の姿とした長持形石棺に、頂部を区画しようとするころみがなされたことは大きな変化で、縄掛突起の減少や位置の移動などと同じく、次期の家形石棺にうけつがれる要素とみなしてよい」(395頁)とした。

1983年の春成秀爾「造山・作山古墳とその周辺」は、①本石棺の類例として熊本県鴨籠古墳石棺を挙げた点、および②本石棺の帰属古墳として車塚古墳説をとりつつ、同古墳の埴輪の実測図を公表し、年代的位置付けを提示した点が特に重要である。本石棺と鴨籠古墳との関係性については、現在も石棺系列や年代的議論のひとつの鍵となるものである。車塚古墳の年代については、その円筒埴輪に竈窯焼成の可能性を指摘し、技法や大きさ、粗雑化の程度から造山→作山→榊山・寺山→車塚の順序を想定した上で、5世紀後葉～末の年代を与えた。

春成の研究を受け高木恭二「鴨別と鴨籠」(1986年)は、本石棺の年代を鴨籠古墳石棺(図5.2)の年代観から5世紀後半とし、帰属古墳が車塚古墳となる可能性を指摘しつつ、両古墳の関係性について論じた。また、高木の「九州の舟形石棺」(1987年)では、本石棺を長持形石棺の範疇で捉えつつ、推定製作地として氷川下流域の可能性を指摘した。この製作地の推定は、石材が阿蘇凝灰岩である点に加え、鴨籠石棺との類似性、および千足古墳石障が宇土半島から天草にかけての地域から運ばれたとの認識に基づく。

1990年に発表された高木恭二・渡辺一徳「石棺研究への一提言」は、間壁忠彦・間壁菫子論文(1974)が「二上山ピンク石」と認定していた石材を「阿蘇ピンク石」(阿蘇溶結凝灰岩の中でピンク色のもの)とすべきであることを自然科学的分析および肉眼観察から実証した点でも著名である。その中で、「阿蘇ピンク石製石棺」10例と「関連石棺(阿蘇溶結凝灰岩)」3例が提示され、本石棺は後者の関連石棺に位置づけられた。「関連石棺」とは、阿蘇ピンク石以外の石材で作られた、阿蘇ピンク石石棺と共通する形態、すなわち「棺蓋長辺の側縁ないし斜面部に円柱状縄掛突起を持つもので、棺身に突起がない」(25頁)石棺のうち、阿蘇溶結凝灰岩製の3例(鴨籠石棺、本石棺、大分県王ノ瀬石棺)を指す。阿蘇ピンク石製石棺については、いずれも九州外からの出土という分布上の特性を有するものとされ、その製作地に関しては、露頭と同石材を用いた古墳の分布から宇土半島が新たに比定された。「関連石棺」の石材産地については明確ではないが、「阿蘇ピンク石石棺」同様に宇土半島が当てられているようである。こうした石材に関する新たな認識のもと、本石棺の形態的特徴についても議論され、編年的位置付けがなされた。すなわち形態的特徴として、蓋については蒲鉾形に近い屋根形であり側縁部に縄掛突起を有する点、身については側縁部に膨らみをもち横断面形が台形状をなす点が指摘された。こうした特徴は、長持形石棺的要素を有する舟形石棺と解釈され、その年代については5世紀後半でもはじめごろとし、鴨籠石棺に後続するものと考えた。

倉林眞砂斗「石棺」(1992年)は、本石棺を「蓋石には、明瞭とはいえないものの頂部平坦面が認められ、屋根形に近い形状を呈していたと推測」(267頁)した上で、「身部には長持形石棺の特色を、蓋石は屋根形に近い形状を呈し、短側辺中央に円柱状の突起が作り出されるなど舟形石棺の特色をも

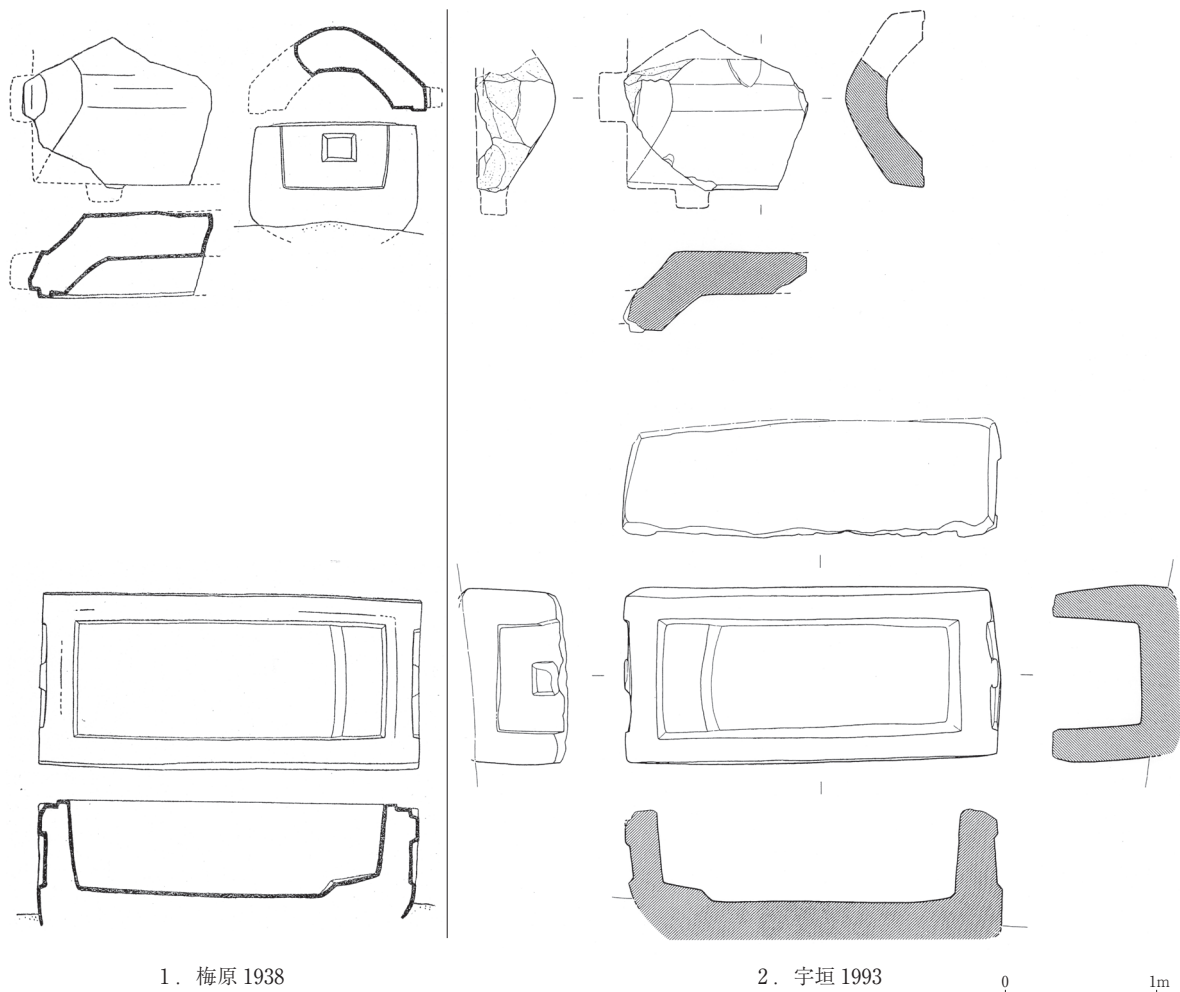


図5.1 造山古墳前方部所在石棺に関する既往の実測の成果 (S = 1/50)

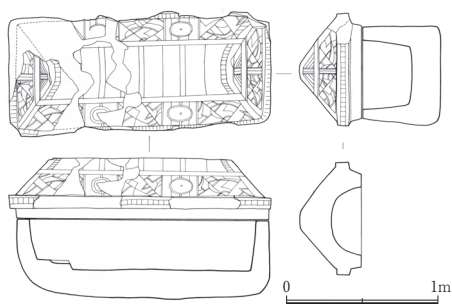


図5.2 熊本県鴨籠古墳石棺
(S = 1/50)

備え」(268頁)るものと評価した。

1993年の宇垣匡雅「造山古墳前方部所在石棺について」は、本石棺を主題とした研究として画期のひとつといえる。宇垣の大きな成果は、①再実測を実施しその成果を公表したこと(図5.1-2)、②蓋小口外面における線刻文様(直弧文)を発見し、その拓影を提示したこと、③帰属古墳として造山古墳説を主張したことにある。直弧文に関しては、少なくとも定型的なA型・B型直弧文ではないとし、石人山古墳石棺の蓋短側面の直弧文同様に、「かなり変形した形でAないしB型直弧文が描かれているか、変形の鍵手文

であるかいずれか」(55頁)と考えた。また帰属古墳と時期については、和田千吉の報文を蓋然性が高いものと考え、造山古墳説を支持した。

1994年の『古代文化』誌上で発表された刳拔式石棺に関する特集は、本石棺研究にとっても重要な意味をもつ。高木恭二(1994)は、九州の舟形石棺を分類する過程で、本石棺を「中肥後型」に位置づけた。中肥後型とは、蓋長側辺に2個ずつ、計4個の縄掛突起を作り出し、身に突起を有さない

いう形態的特徴を有し、石材としては阿蘇ピンク石や灰黒色の阿蘇石である本石棺などが含まれるとされる。また中肥後型の性格として、本石棺の形態や中肥後型の突起の数・配置を論拠に、長持形石棺からの影響を挙げるとともに、分布が九州外を主とすることからそれを特注品と結論づけた。間壁忠彦（1994 a）では、本石棺を長持形石棺とした上で、屋根形の蓋や、蓋と身を印籠合わせとする特徴に九州の舟形石棺の影響を指摘した⁽¹⁾。なお、和田晴吾（1994）では、高木（1990）の「関連石棺」に該当する3例の石材について「阿蘇黒石」という名称がみられる。

2003年に刊行された『新宇土市史』では、高木の一連の研究成果が活かされている反面、本石棺の年代的位置付けに変化が認められる。高木恭二「第4章第3節 特色ある石棺の文化」では、本石棺帰属古墳を造山古墳、年代を5世紀前半終わりとした。また、本石棺の蓋に直弧文が発見されたことから、鴨籠石棺との関連性はますます強まったものと評価した。なお、石棺製作地と関連して、本石棺の石材に関しては「馬門石」と捉えられている。以後の研究でも同様であり、馬門石にはピンク、ベージュ、灰色などがあるとされる（高木2010、330頁）。

藏富士寛「阿蘇石製石棺」（2007年）は、高木恭二の研究をもとに「中肥後型石棺群」を①棺蓋が屋根形を呈し、②蓋長側辺の側縁部分もしくは屋根斜面部分に二突起を配するものを基本とすると規定した上で、それが集成編年9期をピークとした8・9期に製作されたものとみる。本石棺については鴨籠石棺とともに中肥後型の初源と考え、鴨籠石棺を集成編年6期、本石棺を7期に位置づけた。また、中肥後型石棺群について藏富士は、所有は有力者に限られ、分布の中心を近畿周辺地域にもつものとし、九州における石棺の脈絡ではなく倭王権の政治的意向が反映されたものと評価した。

(2) 問題の所在と課題

以上のように本石棺については、その形式や石材、年代と帰属古墳、地域系列（「型」）、そして歴史的位置付けについて議論が積み重ねられてきた。しかし必ずしも定見を得ない点もまた存在する。現状における本石棺をめぐる論点のいくつかを以下に挙げてみよう。

第一に、蓋の外表面形に関する認識に様々な表現が用いられてきた点である。基本的には「屋根形」（梅原1938、間壁忠彦・間壁葎子1974）とする認識で一致しているものとみられるが、「蒲鉾形に近い屋根形」（高木・渡辺1990）とするものから、「頂部に平坦面を有する屋根形」とするもの（西谷1982、春成1983、倉林1992、林田2007）など、頂部の認識に差異がみられる。これは形態という基本的事項であるために、いっそう厳密な検討が必要となる。

第二に、年代観に開きがあるという点である。すなわち、本石棺の年代に関しては5世紀前半説と5世紀後半説とに分かれる。こうした年代観が本石棺の帰属する古墳と密接に関連することも明らかであり、5世紀前半説は造山古墳とし、後半説に関しては車塚古墳を想定する場合が認められる。近年においても5世紀後半と見る向きもなお根強いが（増田2003）⁽²⁾、宇垣（1993）以降に5世紀前半説が多くみられる傾向がある。高木恭二も当初は5世紀後半説＝車塚古墳説であったが（高木1986・1990）、近年は前半説＝造山古墳説への変更がなされた（高木2003）。しかしいずれにせよ、本石棺の型式学的位置付けに関する議論がいっそう必要なものと考ええる。

第三に、蓋小口部に残存する直弧文の問題である。これに関しては、宇垣による類例の検討がなされた一方で、具体的検討作業はその後の研究で深められていない。遺存状況の悪さから直弧文の全体像がうかがえないという資料的制約は確かに存在するものの、その位置付けは大きな課題として残る。

(3) 予 察

上述の課題を考える上で、2008年に実施された本石棺の三次元計測は、研究の重要な契機となるものと期待される。これまでも実測を通じた資料化の試みがなされてきたが（梅原1938、宇垣1993）、三次元計測の実施は、本石棺の資料化に関する新たな段階を示す。以下では、その成果と現地観察を踏まえ、形態に関する点を中心に、現時点での若干の問題提起を行いたい⁽³⁾。

問題として指摘した蓋外面頂部の横断面形について検討しよう。頂部を確認できる破片は、これまで図化されてきたもの（図5.3-1）の他に、一辺50cm程度の破片が存在する（2、新納2008）。三次元計測は、これら2つの破片を対象に実施された。蓋外面の遺存状況は悪いものの、三次元計測図には風化による表面の剥落や凹凸の状況も反映されている。遺存状況の比較的良い箇所を検討した結果、蓋外面の横断面形状に関しては、次のことが指摘しうる。

①蓋斜面部は横断面形では直線をなす。

②現状において明確な頂部平坦面や、それを形成する稜は認められない。むしろ、短側面観からもうかがえるように、頂部がごくゆるやかな弧をなすように観察される。

従来、「屋根形」の蓋とされてきた根拠については、①の要素に関する認識を基礎として、頂部平坦面の想定がしばしばそれに付加されてきたものと推測される。斜面部が直線をなすことにより、斜面部/頂部という区分け（傾斜変換線）は必然的に生じるため、この点において「屋根形」という表現は適切なものと考えられる。しかし少なくとも「平坦面」の存在は認めがたく、頂部自体が弧をなしながら斜面部と連なるものとする。

こうした蓋をめぐる評価は、以下のような本石棺の様々な位置付けに関連する点で、さらなる検討が必要である。第一に、蓋の形態認識と形式との関係である。「屋根形」という評価が九州の舟形石棺と本石棺を結びつけてきたが、上記①②の特徴は、長持形石棺の新しい要素である可能性も考えられる⁽⁴⁾。すなわち、和田晴吾が長持形石棺の時期的変化に関して述べた、「短辺側に斜面が形成されるようになるとともに、弧状の短辺が直線化」（和田1996、18頁）する和田編年7・8期（和田1987）の長持形石棺との関連性も考慮されるべきであろう。この点については、斜めに面をなす蓋短側面の形状、およびそこからのびる突起をめぐる評価とあわせて検討が必要となる。

第二に、これまで本石棺と最も類似する石棺とされてきた鴨籠石棺との関係である。石材に加えた両者の最大の類似点は、身の枕部側底面がゆるやかにカーブする点（高木1986）と考えられる。しかしこの底面の特徴に関しては、宇垣が別の類例も示唆するように（宇垣1993）、必ずしも両者に固有のものでない点にも注意が必要である。加えて本石棺の蓋頂部は、鴨籠石棺にみられるような頂部平坦面を有する四注式の屋根形表現とも差異を有する。

両石棺の編年的関係については、鴨籠石棺→造山古墳前方部所在石棺という位置付けが想定されてきた（高木・渡辺1990、藏富士2007）。しかし型式変化の指標となる突起の位置でみれば、両者ともに蓋下端に突起が存在するため時期差は見出しがたい。両者を比較するならば、長持形石棺の要素が強い本石棺を先行させ、蓋頂部が平坦化する鴨籠石棺を後出させるべきではないだろうか。なお、鴨籠古墳に関しては、年代の根拠となる遺物に乏しく（三島1984）、年代的な位置付けが困難な古墳といえる。突起の位置でみれば、集成編年7期（宇垣1991）に位置づけられる阿蘇ピンク石の岡山県長船町築山古墳（梅原1957）、および竜山石製でありかつ組み合わせ式長持形石棺であるものの、本石棺同様に蓋短側面に一つの突起を有する赤磐市朱千駄古墳（村上1984）よりも本石棺は古く位置づけうる。この点からも、本石棺をおよそ集成編年7期とする説（藏富士2007）の成立は困難さを伴う。

第三に、本石棺と中肥後型という「型」との関係についても検討の余地を生じさせるものと考え

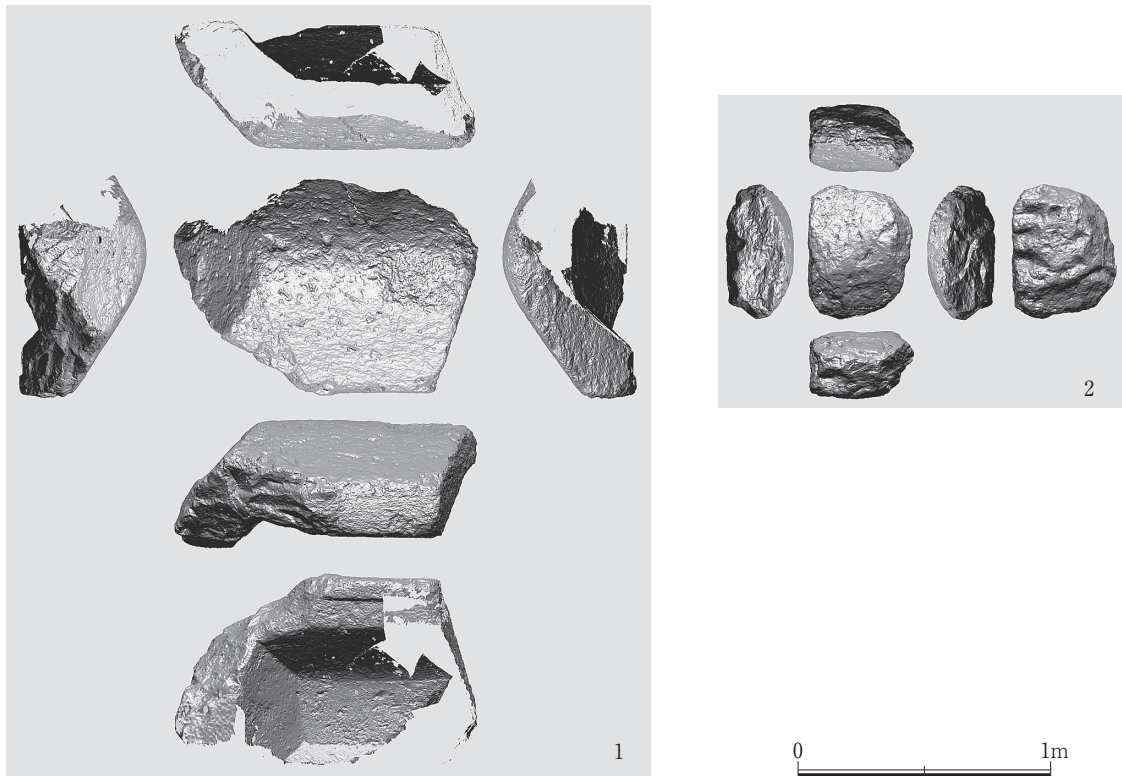


図 5.3 造山古墳前方部所在石棺の三次元計測図 (S = 1/30)

る。中肥後型の形態的特徴が、A) 蓋長側辺のみに2突起(計4突起)を配し(高木1994、藏富士2007)、加えてB) 棺蓋が屋根形を呈する(藏富士2007)ものを基本とするのであれば、短側面にもひとつの突起を有する本石棺はもともとAには当てはまらない。加えてBについては、蓋の形態を屋根形の範疇で捉える点では妥当といえるものの、鴨籠石棺との比較でみたように蓋頂部の横断面形には差異が生じる。もっとも、石棺の「型」が石材と形態、分布とがひとつに結びついた概念(和田1976、25頁)であるにせよ、中肥後型は当初から本石棺のような形態的バリエーションを含む形で設定されたものである。そうした変異よりもむしろ、九州外の阿蘇溶結凝灰岩製の石棺であり、鴨籠石棺とも類似し、長持形石棺的でもあるという評価のもと、本石棺は中肥後型のひとつに数えられてきたものと考えられる。しかし上述の編年の位置付けも含め、「型」の問題についても議論を継続すべきと考える。

おわりに

本稿では、造山古墳前方部所在石棺をめぐる研究史を紐解きながら、いくつかの議論すべき方向性について考えてきた。その上で、蓋の形態的特徴に関して三次元計測の成果を踏まえ、問題提起を試みた。多くの優れた研究の蓄積がある本石棺ではあるが、その特異な形状ゆえにいまなお議論すべき点も多いものとする。三次元計測の試みがその契機となるものと確信し、今後も検討を重ねたい。

註

- (1) 本石棺の年代について間壁忠彦は、九州の舟形石棺との関係から中期の前半までは遡らないとした(間壁1994a)。この見解は間壁忠彦による石棺に関する集大成的著作(1994b)でも同様であり、本石棺は5世紀後半ごろに位置付けられた。なお、帰属古墳については、造山古墳の追葬や車塚古墳も含め、慎重な態度を示した。
- (2) 増田一裕は本石棺を阿蘇系石材長持形石棺とし、最後の長持形石棺群としてTK23・47型式に位置づけた(増田2003、8頁、図11)。
- (3) なお蓋短側面の直弧文に関しては、宇垣(1993)の評価が現在においても妥当なものとする。裾広がり二本線からなる一対の弧線と、それに接続するかのような帯状文が観察しうるものとする。前者に関しては、B型直弧文(伊藤1984)の一部か、一種の「人字形文」と考えるが、今後の検討が必要である。
- (4) ただし、本石棺の蓋内面に関しては、稜を有する屋根形を呈するものであり、この点は長持形石棺とは異なる。

<引用文献>

- 伊藤玄三 1984『直弧文』ニューサイエンス社
宇垣匡雅 1991『備前』『前方後円墳集成』中国・四国編、山川出版社、pp.61-67
宇垣匡雅 1993「造山古墳前方部所在石棺について」『古代吉備』第15集、pp.52-57
梅原末治 1938「備中千足の装飾古墳 附造山古墳遺存の石棺」『日本古代文化研究所報告』第9、近畿地方古墳墓の調査3、pp.56-69
梅原末治 1957「岡山県下の古墳調査記録(二)」『瀬戸内海研究』第9・10合併号、pp.1-13
倉林眞砂斗 1992「石棺」『吉備の考古学的研究』下、pp.263-285
藏富士寛 2007「阿蘇石製石棺 ― 熊本県域における事例について ―」『大王の棺を運ぶ実験航海』研究編、石棺文化研究会、pp.36-45
高木恭二 1986「鴨別と鴨籠」『文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU』第6巻第2号、pp.34-40
高木恭二 1987「九州の舟形石棺」『東アジアの考古と歴史』下、岡崎敬先生退官記念論集、同朋社出版、pp.234-267
高木恭二 1994「九州の刳拔式石棺について」『古代文化』第46巻第5号、pp.25-47

- 高木恭二 2003「第4章第3節 特色ある石棺の文化」『新宇土市史』自然・原始古代、pp.471-501
- 高木恭二 2010「割竹形石棺・舟形石棺」『日本考古学協会2010年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会2010年度兵庫大会実行委員会、pp.327-340
- 高木恭二・渡辺一徳 1990「石棺研究への一提言 ― 阿蘇石の誤認とピンク石石棺の系譜 ―」『古代文化』第42巻第1号、pp.21-32
- 高橋健自 1915「石棺石槨及び墳を論ず(1)」『考古学雑誌』第5巻第10号、pp.11-37
- 新納 泉 2008『石棺の三次元計測 ― 岡山市造山古墳前方部所在石棺を対象に ―』 <http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/13797>
- 西川 宏 1971「岡山県造山古墳とその周辺の前半期古墳」『古代学研究』第60号、pp.41-45
- 西川 宏 1986「造山古墳」『岡山県史』第18巻 岡山県、pp.342-343
- 西谷真治 1982「長持形石棺 ― その成立と系統 ―」『小林行雄博士古稀記念論文集 考古学論考』pp.385-402
- 林田和人 2007「九州外の阿蘇石製石棺解説2（宇土半島産）」『大王の棺を運ぶ実験航海 ― 研究編 ―』石棺文化研究会、pp.237-259
- 春成秀爾 1983「造山・作山古墳とその周辺」『岡山の歴史と文化』福武書店、pp.1-40
- 間壁忠彦 1994a「中国地方の刳拔式石棺」『古代文化』第46巻第5号、pp.2-9
- 間壁忠彦 1994b『石棺から古墳時代を考える ― 型と材質が示す勢力分布 ―』同朋舎出版
- 間壁忠彦・間壁葎子 1974「石棺研究ノート(1)石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」『倉敷考古館研究集報』第9号、pp.1-23
- 間壁忠彦・間壁葎子 1975「石棺研究ノート(3)長持形石棺」『倉敷考古館研究集報』第11号、pp.1-41
- 増田一裕 2003「家形石棺の基礎的研究(中)」『古代学研究』第163号、pp.1-20
- 三島 格 1984「鴨籠古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集 熊本県教育委員会、pp.119-123
- 村上幸雄 1984「白い棺と赤い棺」『えとのす』第25号、pp.74-82
- 和田千吉 1919「備中都窪郡新庄下古墳」『考古学雑誌』第9巻第11号、pp.33-45
- 和田晴吾 1976「畿内の家形石棺」『史林』第59巻第3号、pp.1-59
- 和田晴吾 1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号、pp.44-55
- 和田晴吾 1994「近畿の刳拔式石棺 ― 4・5世紀における首長連合体制と石棺 ―」『古代文化』第46巻第6号、pp.2-17
- 和田晴吾 1996「大王の棺」『仁徳陵古墳 ― 築造の時代 ―』大阪府立近つ飛鳥博物館、pp.15-20

図出典 図5.1：1. 梅原1938、2. 宇垣1993。図5.2：三島1984。図5.3：新納泉提供。三次元計測については西部技術コンサルタント株式会社に依頼がなされ、福田史士氏を中心に作業が実施された。